或る坑内労働者のメモから

現認証といえば、現場の労働者が業務上負傷した場合、現場の末端職制の手で発行される負傷証明で、これがもらえないと、たとえどんなに公傷認定の申請手続をとろうと思ってもできず、現場に働く労働者にとっては非常に大切なものになっている。これは、その現認証をめぐって最近三川鉱で起きた実例である。

現認症

とんだ負傷

その日Aさんは、Bさんと、ベルトコンベヤーの向かい側にあるモーターを、四本の柱で押える作業をしていた。

そのうち作業終了。Aさんはベルトコンベヤーの下を通って、ゲート坑道にでようとした。ベルトコンベヤーは人の背ほどまで吊りあげてあるので、体を少々かがめれば通れた。

ところが冠っている坑帽がベルトの底に当たったため、体が思わずよろけ、とんだことに左腕をベルト下のリタンローラーにかまれてしまった。Bさんの助力でその腕を必死にとりだそうとしたがダメだったのが、さいわいほかの人がベルトコンベヤーの非常スイッチを切り、その運転を止めてくれたから、かまれた腕が取りだされたものの、Aさんはすでに負傷していた。

係員抵抗す

Aさんならずとも、負傷した場合はただちに工具倉庫（無線ステーション）にきて、まず無線機を使い直接担当の係員を呼びだしてもらう。それぞれ職場には、三人くらいの係員がいる。

Aさんの場合もさっそく無線機で呼びかけた。

「Aさんが負傷した。応答願います」

なかなか応答がこない。現認証に署名して渡せば、その係員はさっそく鉱長室に呼びだされて油をしぼられるばかりでなく、大事な成績にかかわる。だから彼らはお互いに牽制し合っていて、たとえ無線機が伝える声が聞こえていても、ぐずぐずするのである。ひどい例になると、急患がでてさえ、昼までお姿を現わさないことさえある。

また折角姿を現わしたといっても、こんどは現認証書く用紙を持ってきていないそぶりとなる。カバンのあちこちを探すマネだ。十分間合いをとって、たとえケガをしたからといって、何とかしてその者が昇坑しないですむテはないものか。やむを得ず昇坑するとしても、保安部預けにして、現認証を書かずにすまされないものか。よげればそのまま坑内の現場に下がって、軽作業にでも就けないものか。

それでダメならこれ、これがダメならあれ、とさかんに負傷者を責めたてるのである。

すべてがダメだとわかると、いまはあきらめて現認証を書いてはくれるものの、そんなときはつとめて不機嫌な様子をして見せ、そして昇坑人車を一つでも遅らせるように熱心な努力を傾ける。

どうか保安部預けに
でないと私は叱られる

いざ昇坑して仮治療所にいけば早くも人事係と仮治療所員が待ちかまえていて、「仮治療所ですまされないものか。もしすまされなければ、病院はどこを選ぶか。せひ天領病院（三井鉱山経営）を選んでもらいたい」とくる。もし負傷者が白鳩や曙病院（労働者の病院）とでもいおうものなら、精いっぱい不機嫌な顔をむきだしにしてくることになる。

Aさんの場合、それでも天領病院をさけてほかの病院にいって診てもらったが、お陰でレントゲンを撮ることも要らず帰宅。

そこへ待ちかねたように、現場係員からの電話だった。

「大丈夫のようだが、ぜひ出勤してくれぬか。軽作業に繰り込むから。休んでもらうと私は叱られるうえに成績が下がる」

相手が新労組員ならば、その日のうちに係員自ら家にまでやってきての説得となる。

現認証手に

さてAさんは手にした現認証をもって翌る日会社にゆき、まず係員詰所で担当の主席係員―係長の順に印をもらうと、こんどは保安部だ。

保安係長、さも目の前の本人が不注意のために負傷したといわんばかりに問いただす、「なぜ、ベルトを止めて作業をしなかったのか。この負傷は避けることができなかったのか」。

さしずめ、新労組員ならこの段階で、現認証の"原因"の「不注意」の欄に、たいてい○印を記入される。

だがAさんは――

「いま現場では、何かの都合で払のカッターを止めざるを得ないとき、たとえベルトコンベヤー当番に、作業員名、作業内容、所要時間、担当係員名、などをあげていくら連絡しても、無線機で鉱長室に連絡してから初めて止まることになる」

と、余りな現状について抗議していると、いつの間にかその後ろにきて立っていた担当係員、Aさんの袖をひきながら「余りいうな」の合図。

Aさん、それをかまわず次の鉱長室へ。どうしても、現認証に副長の印がいるからだ。

最後の関門

鉱長室へ近づく。なかから、ドンと机をたたく大きな音。ドアを開けると、だれかが直立不動の姿勢で立っていた。

「こんな出炭でどうするんだ。中小の炭鉱なら、いま頃はつぶれているんだ」

明らかに鉱長の荒声だった。直立不動の姿勢で立っているのを見ると、何とこれが、いま現認証に印をもらってきたばかりの担当係長だったのである。

ズイと入っていくのに、副長の静かな声。

「Aさん、私の前に二度と負傷などしてこないように」

最後の関門を越え、初めて現認証へ押してもらうべき捺印が終る。

Aさんは、いよいよ病院へ。

「ベルトをとめて作業をしたら……」との保安係長の日々しい言葉に、ヘドを吐きかけてやりたい気持を抱きながら……。

×

いま三池炭鉱で"現認証"は、労働者が人間として生きるか、それとも人間を棄て、屈辱にあまんじて生きるかをためす"踏み絵"になっている。

豆情報

建設省が会計検査院を供応。泥棒の留守番。建設公債増発、増税なんて冗談じゃない。

×　×

「戦争でも起こらねば…」と財界トップが発言。不況か戦争か、と国民に迫るつもり？

労災2,000万円を獲得
全港湾、倍額達成へ

労災企業補償を統一要求として秋闘を闘っている全港湾で、横浜支部六分会に死亡・一～三級＝二千万円日本海地方の新潟臨港、伏木海陸、富山港湾に千八百万円など、高額の回答が相次いでいる。

春闘共闘の調べでは、七七春闘で労災補償二千万円台を獲得した組合は、食品、観光労連を中心に四十一組合。全港湾ではこの秋闘で現行水準の倍増をめざして死亡＝二千万円、一～三級＝一千四百万円を要求、横浜の六分会でほぼ満額の回答を得たもの。通勤途上災害も同額。全港湾ではこれを到達目標に、他の地方でも二千万円水準獲得へ一気に追いあげる方針だ。

負傷現認証　No.＿＿＿＿

注 1 ※印は医師にて記入
2 △印は治療所にて記入
3 その他は係員にて記入
4 時間はすべて24時間制にて記入

三川鉱　新労　労組

職名	番号	氏名	△　年　月　日生（　才）
部内	方別		△　年　月　日入社
負傷日時		住所	
年　月　日　時　分			
S			
負傷場所			
繰込時間	負傷部位	現認者職名氏名	
時　分		職名	氏名
原因及状況	何の目的で		
	どんな作業		
	どうしていたとき		
	どうしてどうなる時		
	どうしてどうなつた		
係員職番氏名印		受付 △　年　月　日	取扱者印 △

初診日	傷病名	休業見込日数
※　月　日	※	※
初診時の病状	※	

災害等級見込	病院名	担当医師名
※　級	※	※

これが、三川鉱で、現場の末端職制の手で発行される現認証。これを発行してもらうさえ容易なことではないのに、そのほかにも2枚の書類があつて、印カンをもらつて歩かなければならない。結局は負けて、骨折していても坑内現場にさがる例さえ出てくる始末である。

有明鉱でマイト災害
佐々木さんら二人重傷

つい十月に三池炭鉱に合併されたばかりの有明鉱で、心配されていた災害が発生。そのため二人の坑内労働者が重傷を負った。

災害は、十一月二十九日午後四時二十分ごろ起きた。

重傷を負ったのは、掘進員の佐々木征一郎さん（38歳。福岡県三池郡高田町下楠田アパート居住）と係員の野口憲二さん（43歳。大牟田市馬渡町一四居住）の二人。

佐々木さんが「角膜球・結膜挫傷、播種状異物」、野口さんが、「両眼部打傷」ですんだからよかったものの、ただ佐々木さんの失明が心配されているとか。

災害が起きたところは上層四号払風道（地下三百五十メートル）で、佐々木さんらは盤際にマイトをこめる穿孔作業中、ダイナマイトにノミをくり当て爆発したものと推察されている。

原因はいうまでもなく、ダイナマイト管理のずさんさにある。たとえそれが残留マイトだったとしても、それが不発のまま残されていたのは結線もれによるのは確実で、穴尻確認が不ゆきとどきだったことは争えない。

十一月二十五日発行の社内報"くろだいや新聞"は、その第一面トップで「有明鉱の揚炭ベルト完成。一日三千五百トン輸送始まる。出炭能率も大幅に向上」（以上はその見出し）とデカデカと報じ、「この調子では、出炭面では百万トン体制づくりもすぐにできそうだ」と会社側の満足ぶりを伝えている。こんどのマイト災害は明らかに生産第一主義だけしか見ない会社の保安軽視がひき起こしたことは明らかで、会社の災害責任は大きい。

砂川では死亡災害

会社情報によると、有明鉱のマイト災害と同じ日の十一月二十九日午後六時十分ごろ、北海道の砂川鉱が死亡災害をひき起こした。

死亡したのは掘進員の渡部基さん（29歳）で、五十年一月二十七日入社の人だった。

災害発生箇所は同鉱第一坑の七六〇LS二九番層南上添サブレベル。ハッパ一払後施枠矢木掛をほぼ終り、切張作業中急激な盤圧があり、枠に荷がかかってきたので係員ほか二人はいそぎ退避したものの、渡部さんだけが逃げ遅れたため罹災した、とされている。

新しい石炭政策のなかでも、各やまで炭鉱労働者の命が依然として奪われ続けてゆくが、このような恐るべき状況は、ほかの産炭国ではその例が見られないことだけに、十分考えなければならない問題だ。

つづく説得

これは三川指導部七分会新聞"あせ"（十一月十五日発行一四一号）のなかの「E生」さんの手記。

×

ハーワーユー

私が背を丸めて仕事をしていると、だれかが背中をたたく。

背を伸ばすと、「ハー・ワー・ユー」の声がかかってきた。

「おす」

返事も、あいにくこれしか持ち合わせがない。後で聞くと、豪州人が十数人つれだっていたという。真っ白く、岩粉が散布されている意味がわかった。いつも、こんな状況を見せてもらいたいものだ。

やまに働く炭鉱労働者として、絶対に許すことができない。